



教育ゆりほんじょう

第 27 号
令和 8 年 8 月 27 日
由利本荘市教育委員会
学 校 教 育 課
教 育 支 援 セ ン タ ー

教育委員の皆様から

前期の学校訪問を終えた教育委員の皆様へ、訪問の感想や学校教育に対するご提言など、日頃からお考えになっていることをお寄せいただきました。

「深い学び」を求めて

教育長職務代理者 小坂綾子

文部科学省の次期学習指導要領に向けた検討状況の講演を聞く機会に恵まれました。

検討の基盤は、①深い学びの実装②多様性の包摂③実現可能性の確保の3つの視点です。自らの人生を舵取りする力と民主的で持続可能な社会の創り手の育成を目指し、見通しをもち今から明日の授業改善につなげるために、情報を提供していると話していました。

資質・能力の深まりや一体的に育成するイメージが掴みにくく、「深い学び」を実現する授業づくりがしにくい。これを解決するため、子供達に育む資質・能力が分かりやすく、日々の授業づくりの際に教師一人一人が使いやすい学習指導要領を目指す。そのため「構造化・表形式化・デジタル化」を一体的に進め、「深い学び」を授業で具現化しやすくすることを目指している、と説明していました。

確かに、「深い学び」を実現する授業づくりは難しいです。主体性を引き出す初発の発問、対話的な学びを深める中心発問、最後に、振り返りにより、自己の学びの深まりを自覚し、活用を促す終末の発問。この3つの発問を柱に、子供主体の学びに寄り添い・支え・つなぐために「間」を大切に、子供の学習速度・習熟度・適性の違い等を的確に捉え、どの子にも深い学びが実現できるように、子供一人一人の可能性を引き出し、安心して自分らしく学べる環境を作ることが望まれます。

指導要領をデジタル化し、指導計画や資質能力の連続性や各教科の系統性などは、教科書の指導内容と関連付けて同時に表示されるようになるそうです。しかし、どんなに構造的で優れた指導計画を作成しても、ひとたび授業に入ったら子供の表情や反応に合わせて柔軟に展開することが、目の前にいる子供達の資質・能力を育むためには欠かせません。

対話的な学びが、刺激し合い、共に探求し合い課題解決に迫る考えの広がりや深まりが得られる質になっているか、自由がゆえに居場所のなさや苦しむ子供がいないかなど、子供が安心して学び成長できる環境は、いつの時代も教師の弛みない努力の賜物だと思います。

巧みに設定された場で、深い学びを体感できた子供達の輝く瞳と笑顔に感動しています。

前期学校訪問を終えて

教育委員 佐藤道昭

今年度から学校訪問の日程が年間を通じて各一校につき一度の訪問となりましたが、今年も夏の訪問に際しまして、各学校におかれましては行事多忙の中、訪問準備を行っていただきまして御礼申し上げます。

今回も子供達の元気な姿と、先生達の笑顔で明るい声かけを各所で拝見できたこと、委員会全員が安心して市内全校のうち半分の訪問を終えることが出来ました。

去年の秋から引き続き「熊対策」に神経と労力をすり減らして、大変ではありますが、その件も含めて「安全安心な教育環境」を今後もお願いいたします。

[不登校対策について]

最近では、「ふれあい教室」を学校規模にまで拡張する自治体が出てきましたが、私個人としては「まずは学校に来て他者とふれあい、共に成長する」という点を、今まで通り最優先してほしいと思います。実際、本市の各学校に於いては先生方が大変努力されていることを喜ばしく感謝しております。

[少子化地域への環境整備について]

さて、一部地域では数年前には確実に始まるであろう「複式学級」への対応に、地域ぐるみで考える必要が出てきました。学域の広大化を鑑みるに、これ以上の統合も困難な地域性もあり、更なる人口流出と少子化も防ぎようがない現状では、保護者・地域・行政・教職員でじっくり話し合い、子供達にとって少しでも良い環境を維持できればと思います。

また、生徒数減少によるスポ少と部活の今後については、運動部のみならず吹奏楽などの文化部でも課題があると思います。教育委員会でも考えていきますが、現場の教職員の皆様から様々なご意見を頂きながら、子供達に、より有意義な体験を通して、素晴らしい育みが続けていける環境を作りたいと思います。

最後に、教職員の皆様・教育委員会の皆様には、これからも児童生徒の健やかな育みを志していただく事をお願いいたします。

わたしたちの解

教育委員 佐藤 美帆

7月中旬、教育委員教育長研修会に参加しました。今年の開催地は岩手県盛岡市でした。冷麺とホヤ貝とわんこそばを筆頭に、美味しいものばかりいただいた旅でした。

楽しい学びの旅にするための私たちの選択は、常に対話的であり、それは問いと意見交換により成り立ち得ました。まずは、意見を言いやすい雰囲気作りが肝心です。そして、答えやすい問いを簡潔に発します。相手を理解する気持ちを持って、全員が意見を出し合い、納得解を出します。時には得意分野の人に委ねるという方法も有効ですが、その場合も共通理解を得る過程は必要です。

「お昼は何食べたい？」

「有名な冷麺屋さんもあるけど、今日のSNSを見たらお休みだから、ネットで他のお店を調べてみよう！」

「お土産は何にする？」

「南部せんべいなら暑くても溶けないし、岩手らしいし、持ち運びも軽くてたくさん買えるね！」

今回の研修では、対話からのみ導き出される、絶対でも最適でもない納得解が、私たちの人生と心にもたらす幸福を感じることができました。自分を含む関係者が心から頷き、前進するための答えは、行動に気持ちが伴うため、その成果は非常によい経験として心に残ります。私自身を振り返ってみると、長い間、絶対的な最適解があると信じ過ぎてきてしまったように思います。いかなる条件の元でも通用する万能的な答えがあるということが、希望にさえ思え、1つの正しい答えをみつけたつもりになって、それ以外を受け付けられない態度が、無意識にあったかもしれません。本来、画一的な正解がない課題に対して、主体的・対話的に生み出される答えは普遍性を持たないため、必ずしも客観的な正解と同一ではないのです。

子どもたちが学校教育で身に付ける知識や経験を、ともに生きていくための対話をする力につなげてほしいと思います。自分ひとりとAIでは決して辿り着くことのできない、かけがえない答えがあることに気付きながら、多様な仲間とともに、納得解を形成する力を育むことこそが、学校教育の究極の目的といっても過言ではないのかもしれないですね。

学校訪問を通して感じたこと

教育委員 嵯峨 泰治

今回も学校訪問で授業の様子を拝見し、学校の取り組みなどを教えていただきました。学校に入った際に、子どもたちが元気にあいさつしてくれて、温かい雰囲気を感しました。実際に現場に足を運ぶことで、先生方の日々の努力や工夫がどのように形になっているのかを改めて知る機会となりました。

授業では、子どもたちが自分の考えを持ち、意見を交わしながら学びを深めている姿が印象的でした。先生方も、子どもたちの様子を丁寧に見取りながら、声かけや課題の提示を工夫しており、安心して学べる環境づくりをされていることが伝わってきました。

校内を回ると、掲示物や作品から子どもたちの頑張りが伝わり、地域の方々と一緒に取り組んだ活動の紹介も多く見られました。学校が地域とつながりながら子どもたちを育てている様子は、とても心強く感じられました。地域の大人に見守られながら成長する経験は、子どもたちにとって大きな財産になると思います。

一方で、教職員の負担や生徒数の減少など、学校が抱える課題についても改めて知ることができました。限られた環境の中でも、子どもたちのために力を尽くしている先生方のご苦労を知ることができました。

学校訪問を通して、学校が子どもたちの成長を支える大切な場所であることを改めて実感しました。これからも、現場の声を大切にしながら、学校とともにより良い教育環境をつくっていくための一助になればと思います。

